

## みえ不登校支援ネットワーク 平成 25 年度いじめ対策等生徒指導推進事業

### 「いじめ相談担当カウンセラーの声」

いじめ相談窓口担当 臨床心理士 増田梨紗

昨年度の夏に大津で起きたいじめ自殺は、大変、衝撃的なニュースでした。いじめは、自殺に関わる深刻な問題です。今回の研究事業で方々から集められた声のなかでも、いじめを受けたことで、自殺を考えたことがあるや、学校に行きたくても行けなくなった、精神疾患を患うことになったという声が多数ありました。また、いじめを受けた子の家族への影響も大きいことが分かりました。保護者は、いじめがすっきりと解決されないもどかしさ、子どもを学校に登校させるべきかどうか、いじめに悩む子どもへの接し方、不登校になることでの受験への影響(将来への心配)など、いじめを受けた子同様の苦しみ、悩みがあるのです。このように、いじめは、いじめを受けた子とその家族を巻き込んだ、人生に関わる深刻な問題だと考えられます。一方、いじめを行った子に対しても意義深い声が集められました。いじめを受けた経験のある子が、やられた気もちをやり返さずにはいられなかったという声や、自分への自信のなさ、大切にされていない感じからいじめを行ったという声がありました。近年のいじめに関する研究でも、いじめを行った子の心理や養育環境、家族関係などが注目されています。いじめを行ってよい理由はありませんが、いじめを行った子に、一方的に非難したり罰を加えたりするだけでは、いじめの根本的解決になりえないと考えられます。

いじめの根本的解決を考えるうえで、学級の雰囲気は鍵になると考えます。クラスの誰もが認められ、受け入れられ、一人一人の活躍の場がある学級では、いじめが生じにくいように思います。学級の雰囲気に関する声は、「みえ不登校支援ネットワーク」参加団体からの「いじめの声」でも多く集められていました。学級の雰囲気は、教師の指導力・統率力といった教師の力量に関わってくるわけですが、「従来の教師への評価基準を変えていく必要がある」という声もありました。学級内で問題が生じた際に対応できたか、という新しい評価基準を設定するという声でした。いじめへの対応は、学校をあげて取り組まれるべきことのように思います。学校が中心となり、保護者、関係機関と協力関係を結びながら、いじめを受けた子が安心して学校に通えるように学級の雰囲気を整えていくべきだと考えます。そして、いじめを受けた子、いじめを行った子をはじめとした、いじめに関係した子への、個別の細やかな対応も実施されるべきです。集団での対応と1対1での個別の対応の、両方の対応を並行して行うことが、いじめの根本的解決になりえると考えます。いじめを受けたことでの心の傷や、いじめを行った子が抱えている心の問題が複雑であれば、スクールカウンセラーや専門家につないでいくことを検討するのがよいかと思えます。